

## 創造 第五十八号（令和6年度） 校長あいさつ

「創造」が今年も学生会の手により発行されることは、まことに喜ばしいことです。

秋田高専の教育の基本は「自立・挑戦・創造」です。「創造」を誌名に採用している本誌は、年度の締めくくりとともに、秋田高専を卒業していく諸君の「創造の力」を元気づけることができれば一番良いのではないかと思います。

未知の世界への探検は、一つの「創造」であると思います。探検の極め付きは南極探検ではないでしょうか。

ルウエーのアムンゼンとイギリスのスコットの隊が南極点一番乗りを競い、アムンゼン隊が南極点一番乗りを果たします。スコット隊は、アムンゼン隊に遅れて南極点に到達してからの帰り道に遭難し、全滅してしまいます。スコット隊は、隊長スコットの日記をはじめとした詳細な記録を残していて、彼らの足取りを詳しく知ることができます。彼らが命と引換えに残した記録が、その後の南極探検に大きな貢献をすることになります。

そして、アムンゼンとスコットが熾烈な競争を展開していたのと同じ時期に、日本人が、秋田県の現在のかほ市出身の白瀬巖が南極探検に挑戦しているのです。にかほ市には白瀬南極探検隊記念館があります。

白瀬巖は、文久元（1861）年、つまり江戸時代の生まれです。

極地探検の予行演習として行った千島探検や、国内での資金調達などの南極探検の準備の段階から、実際に日本を出発して南極にたどり着くまで、苦労と試練の連続で本当に大変なことでした。オーストラリアのシドニーに中継地として入港した際には、一時はスパイ船と疑われるという、今の時代では少し考えにくいようなこともあったとか。外国に行くということがどうしたことだったのか、外国と連絡を取ることがどのくらい困難なことだったのかを、当時の基準で考えてみるべきでしょう。

そもそも白瀬の隊は、政府からの援助がまるでない中で、民間からの募金と白瀬個人の借金で南極探検のための船から装備から何から何まで用意しているのです。アムンゼンやスコットの隊に比べて当然不十分な準備しかできない。それでもなんとか明治 45（1912）年 1 月 16 日、南極ロス海ホエルベイに到着します。前年の 1 2 月 1 4 日にアムンゼンが南極点に到達しており、1 月 1 7 日にはスコットも南極点に到達しています。その後 28 頭の犬が引く 2 台の犬ゾリで南極点に向かいますが、白瀬は自分たちの装備が十分ではないことなども考えて、1 月 28 日に南緯 80 度 05 分、西経 156 度 37 分の地点で引き返すのです。

帰国した白瀬隊は大歓迎を受けたそうですが、その後の彼の人生は南極探検のためにこしらえた借金との戦いで大変厳しいものであったそうです。白瀬巖は、昭和 21（1946）年 9 月 4 日に亡くなります。間借りしていた愛知県の魚屋さんの二階で亡くなったそうです。

現在の南極観測は、国の事業として白瀬の挑戦とは比べ物にならない進んだ技術と優秀な装備を使って行われています。そして、南極観測船は、白瀬巖の偉大な功績を記念して「しらせ」と名付けられています。

明治以降の日本の近代化の中で、多くの偉大な挑戦が試みられ、様々な成果を残してきました。

特に科学技術の分野では、当時の日本の限られた乏しい資金や技術、材料という環境の中で、無理に無理を重ねての苦労の連続でした。ときには周囲の無理解からくる批判を受けることもありました。

また、せっかくの研究成果を外国の権威ある雑誌に発表することがなかったがために、その業績が世界的に認められ顕彰されることのなかった例も多くあります。

私は、「創造の力」とは、環境が厳しければ押しつぶされてしまうようなものではなく、また世間的な評価がどうかということとも関係がないように思います。

私達の先輩が、例えば白瀬巖のような郷土の先人が、考えられないような厳しい環境と困難を乗り越えて、最終的な成果や評価は決して当初の計画通りではなかったとしても、それでも挑戦をやめなかった歴史があります。

現代のみなさんが挑戦していく世界は、未知への挑戦や探検ということが身近に感じにくい世界かもしれません。

しかし、そんな現代でも人知れず挑戦を繰り返し、将来の大きな成果につながるかもしれない努力を重ねている人が、世界中にたくさんいるに違いないのです。

人間の「創造の力」は無限です。どんな環境でも必ず光を発するものです。

皆さんにも、当然「創造の力」がやどっています。自分にはそんな力はないという自らを侮る気持ち。環境が整っていないことのせいにする無責任な気持ち。新しいことを始めることをためらい尻込みする気持ち。そんな気持ちは誰にでもあるものです。そんな気持ちとうまく付き合いながら「創造の力」を発揮していけるように考えてみてください。

みなさんの「挑戦」が「創造」に結実することを確信しています。